

# 坪内逍遙『底知らずの湖』と没理想論

——寓意の解釈を中心に——

坂井 健

〔抄 録〕

坪内逍遙による寓意文『底知らずの湖』は、没理想論の原形として知られているが、単独で論じたものが少なく、論じられた内容も、印象批評的で考察が十分になされているとは言えない。本稿では、文中の表現に即して注釈的な調査を加えつつ、当時の文化状況を考えながら、寓意されている内容について考察した。

「美妙なる帽子」をかぶった男が山田美妙を指すことについては、先行研究で指摘されていない点である。

キーワード 坪内逍遙、没理想、底知らずの湖、シエークス

ピア、山田美妙

## はじめに

坪内逍遙による寓意文『底知らずの湖』（『読売新聞』付録、『筆はじめ』所収、明治二四年一月一日）は、逍遙本人が「造化を湖に喩へ、シエークスピヤを沼に喩へたるにて、我が没理想論のはじめなりき<sup>1</sup>。」と述べるように、没理想論の成立を考えるうえで重要である。ところが、これを取り上げて論じたものは、調べたかぎりでは、中村完氏の論<sup>2</sup>のみである。中村氏の論は、『底知らずの湖』と『梓神子』<sup>3</sup>について述べたものであるが、あらすじの紹介とやや印象的な批評にとどま

っている。

そこで、本稿では、まず、『底知らずの湖』の本文と没理想論の対応を確認し、次に、本文で用いられている比喩の解釈を中心に考察を行いたい。

## (一)

『底知らずの湖』は、語り手が、昨日見た不思議な夢の内容を語る形で始まる。どことも知らぬところに、池とも、沼とも、湖とも見え

る不思議な「湖」があり、そこを訪れる人々が次々とその中に沈んで行き、最後に精霊が現われて語り手に話しかける、という物語である。

この「湖」は、「周囲一町ばかりかと思えば、一二里も十余里もあるべからんとも見」え、形は、「庭鳥の卵のやうに円くして始も無く終も無し」と捉えどころのないものとして描かれる。あたりの風景も、「一面にして百面を具へ一相にして万相を兼ね」る、不思議なありさまである。

最初に現れるのは道服を着て、物々しい容貌をした翁である。次に、この翁を「觀兆夫子」と呼ぶ二人の人物が現われる。一人は坊主、一人はキリスト教徒である。

「觀兆夫子」と呼ばれた翁は、鴛鴦を見ては、夫婦の義を思い、鳥を見ては、子ガラスが成長してから親に恩に報いるために孝を尽くすという故事を思いうかべ、水は智であり、山は仁であるなどと解釈を与えていく。

坊主は、花、紅葉には、色即是空の相が見え、静かな水には、真如が現われているという。キリスト教徒は、青々とした大海原は、無限無窮の天国の生活だ、などと解釈をする。

この三人は、湖が浅そうなので中へ入っていくが、深みにはまって沈んでしまう。

次に、古風な帽子をかぶり、きつちりとした服装に文章を美しく描いた服を着た人物が、物差しと巻尺を持って現れる。彼は、風景の美しさを褒めて、山の姿は隠喩で、花や薄は活喩であると分析し、「テニヲ葉」があるべきでないところに、みだりに散っているなどと文句

をつける。そこへ、頭が大きくて、万巻の書物が入りそうな男が現われ、先の男に「文章ぬし」と呼びかけながら、この湖の風景をどうご覧になるかと問いかけるが、答えを待たずに自分から解釈を始める。あの松は、高砂の松の子孫にちがいないとか、風景は中国の西湖をまねたものであるとか、山々はスイスの面影があるなどと博学ぶりを披露する。この二人も、丸木橋を渡ろうとして、一人は、湖の中に落ち、一人は森の中に姿を隠してしまう。

次に現れたのは、現代風の高帽子をかぶって、馬にまたがった紳士で、この湖に蒸気船を走らせようとか、飛行船を飛ばしたらよからうなどと考え、広さを計ろうと湖の周囲を馬で走るが、馬から落ちて、湖にはまってしまふ。

その次には、田舎じみた多くの老人が現われ、ある者は、山の神が我々の目を楽しませようと作ったものであると言えば、別のものは、世も末なので身を投げるために作ったのだと言う。さらに、湖の水は、薬で、病を癒すためだと言うものもあり、湖は、山があつて水が美しく、水があつて山が美しい、すなわち、山と水とが寄り添っていることを示すためであるというものがある。彼らは、湖について自分勝手な解釈を主張し、いがみあううちに水底に落ちてしまふ。

このありさまを見ていた「美妙」な帽子をかぶった若い男が、自然の「美」をほめたたえ、この「美」を「美」としないで、つまらぬ理想をこの中に求め、形が大きいのを美の本体だとしたり、ひたすら文章博学にこの美の解釈を求めようとする者を「偏、妄、狂、愚」だと批判し、こうした「偏、妄、狂、愚」の連中でさえ、迷いの中にも

感化を受けて溺れてしまった。「美」の力は実に素晴らしいと褒めたえるが、近寄ってきた「胡蝶」を捕まえようとして、自分も湖に落ちてしまう。

次々と人が沈んで行くのを見た語り手は、この恐ろしい湖には「霊」が住んでいるにちがいないと思ひ、逃げ出すが、現れた精霊に行く手をふさがれる。精霊に湖の景色をどう思うかと聞かれた語り手は、正直に、美しいか恐ろしいか分からない、ただ来る人がすべて溺れてしまうのが恐ろしい、昔も今も聞いたことがない、と答える。すると、精霊が言う。お前の国にもこの湖に似た「古池」があるだろう、あそこにも「近き松」がある。松については、訳があるので言わない。古池は、初めは蛙が一匹入っただけだったが、その後数万人の人が飛び込んで、埋まったという噂を聞かないので、これもきつと底知らずの池だろう。この湖は、現在過去未来にわたって底知らずである。底知らずというのは、無量無数の異類を入れても余りあるのを言うので、人間の世界には、これと同じものはないが、これに似たものは二カ所ある。一つは、イギリスの動地の沼 (Shake-sphere)、もう一つは、ドイツにある仰天の沼 (Geotie) の沼である。こんなことをお前のような「白痴」に言っても役に立たないが、来る人来る人を溺れさせるのが恐ろしいと逃げようとしたところに脈がある、と言って去ってしまう。こんな馬鹿馬鹿しい夢を見て目が覚めた、というものである。

## (11)

以上が、筆者による内容の要約である。中村氏も多少要約の仕方はちがうが、内容を紹介したのちに、次のように述べる。

作者の分身として夢に「没理想」の全光景をみた「我」は、「没理想」の理論的追求をころぎして、いったんは「白痴」と化すことになる。そして、この「我」の夢さめてののちの経過は、逍遙内部の「我」がほとんど「白痴」と化し、「偏」「妄」「狂」「愚」のすべてを総合した「白痴」として「没理想」の理論化におもむくのと見合った経過なのだ。

夢の中の光景が「没理想」を現している点については、異存はないが、それ以外には、あまり賛成できない。「白痴」というのは、別に逍遙が「白痴」となったと言っているのではなく、現れた精霊が逍遙の分身らしい語り手に向けて発している言葉に過ぎず、しかも、「偏」「妄」「狂」「愚」とは、文中では結びつかない。「偏」「妄」「狂」「愚」は、「美妙」な帽子をかぶった男が、それ以前に現れた連中に向けて発している言葉に過ぎない。

さらに、中村氏は、次のように続ける。

夢語り「底知らずの湖」における「没理想」の視覚化は、じつは、可視の領域に思想をつぎつぎと押し出しては呑み込む人間意

識の始源状態、文化の始源状態の表象として意味がある。「我」の見聞の最初をふりかえってみれば、それがわかる。「我」のみた「儒」も「仏」も「基」も、じつは、ひとつのところ「没理想」から現れ、そこに帰ったのである。つまり、「儒」「仏」「基」や他の諸思想が「没理想」という先験的な始源状態に未分化のまま並存しているのが「底知らずの湖」である。日本の近代化が西洋の近代思想を時代の「理想」としてうけいれ、浅く展開する経過に逍遙は同伴しながら、歴史の一時代の道標となる理想を解体し、呑み、無化する人間界の「没理想」層のふかさを描きつづけた。言葉をかえていえば、逍遙のいう「没理想」は、日本という一国家の国家理想をさえ呑みつくす想像力の別の名でもあったのである。

このように述べたうえで、さらに次のように述べる。

逍遙のいう「没理想」は、小理想が小理想を駆逐して未消化のまま展開する現代史を日本文化構造の深層に呑みおろし、そこから「理想」を生みなおそうとする再生機能重視の理論構想であった。

一言でいうなら、中村氏は、逍遙の「没理想論」を安易な日本の西洋化・近代化に対する批判として読み取ろうとしているようである。

敷衍していけば、氏のこのような側面もあるだろうが、「没理想」に呑み込まれるのは、西洋的思想・近代的思想ばかりではない。「儒」

も「仏」も呑み込まれているという点に注意しなければならない。第一義的には、西洋化・近代化に対する批判として読み取るには、無理があるのではないか。

### (三)

ところで、稲垣達郎氏が「逍遙のいう「没理想」なるものの最初の手がかりが、この寓意文から得られるといえよう。」と述べるように、逍遙の「没理想」を理解するうえで『底知らずの湖』は、重要である。かつ、没理想論争での逍遙の発言にも連なっていくものである。

中村氏のように、歴史的な文脈の中に位置づけていくことも魅力的であるが、ここでは、まず、『底知らずの湖』に込められた寓意と没理想論争における逍遙の発言との対応を確認する作業を行いたい。

最初の湖に関する「この「湖」は、「周囲一町ばかりかと思れば、一二里も十余里もあるべからんとも見」え、形は、「庭鳥の卵のやうに円くして始も無く終も無し」と捉えどころのないものとして描かれる。あたりの風景も、「一面にして百面を具へ一相にして万相を兼ね」る、不思議なありさまである。」との説明は、直接には「自然」「造化」の性質を現わし、かねてシェークスピアの作品にもつながっている。逍遙は、『シェークスピア脚本評註緒言』（『早稲田文学』創刊号（明治二四年一〇月）において次のように述べている。

予嘗てドラマの本躰を底知らぬ湖に喩へしことありしが近頃ドウ

デン氏の論文を見ればシェークスピアをギョオオトを大洋に比したがあり趣はやゝ異なれども同じ理に帰着すべしと信ぜらる

このうちドーデンの論文云々は、後に逍遙が『没理想の由来』(『早稲田文学』明治二五年四月)で逍遙が次のように述べたのちに引用している英文である。

そもく我が没理想といふ語を用ひはじめしは、明治二十四年の春のことなり。そはシェークスピアの研究に倦みはてたる小絶望の結果なりき。即ち「底知らずの湖」といふ一文章は、造化を湖に喩へ、シェークスピアを沼に喩へたるにて、我が没理想論のはじめなりき。さて、二十四年の二月下旬に至りて、シャークスピアに関する四五の近著を読みしが、其のうちに、前に挙げたるダウデンが「文学の解釈」といふことを論じたる近業の文を見たり。彼れが古来の傑作のうち、教誨の主旨に成りたる作の外に、何の意ともはじめは解しがたき作あり、と論じ来たる続きに、下の文あり。原文は花やかなるを拙く訳して、そこなはんもいかゞ、と原のまゝをこゝに掲ぐ。

“ There are many great works of literature and art from which we learn little or nothing, at least consciously or in set term or phrase; but we go to them as a swimmer goes to the sea. We enjoy bodily and breast the waves, and laugh and are glad, and come forth renewed and satulated with the breeze and the

prize a sharer in the free and boundless vitality of our lover, the sea. We have won health and vigour although the sea has only sung its mysterious choral song; the waves have clapped their hands around us, nor has ocean once straitened his lips to utter a little maxim or a moral sentence. And with such writers we may be trustful and generous, and put aside the petty spiritual prudence which it is well that we should make use of when we go to one who is chiefly a teacher. Such an oceanic writer as Shakespeare or Goethe may contain within his vastness some things that belong to the rankness and garbage of the earth ; but so antiseptic is his large and free vitality, played upon by the sun and breeze, so wholesome is his invigorating saltness that we may dash fearlessly across the breakers, and quit his sands and shallows for a gleeful adventure in the deep.”

これを訳してみると次のようになるだろう。

多くの偉大な文学や芸術作品には、少なくとも意識的には、われわれがそれからほとんど学ばないか、何も学ばないようなものがある。あるいは、次のようにも言い表せるだろう。というのは、「泳ぎに行く人が海に行くように、私たちは、たんに偉大な文学や芸術作品のもとに赴く。」からである。われわれは、どっぴり

と海につきかり、波を胸に受け、そして笑って歓声を上げる。そして、元気を回復し、そよかぜと海水に満たされる。自由で束縛されない活力の共有者は、われわれの愛するもの、海なのである。海は、ただ不可思議な聖歌を歌っているだけなのだけれど、われわれは健康と活力を手に入れるのである。そして、波は、ただわれわれの周りでピチャピチャその手を動かす。そのくちびるは、ほんの少しでも格言じみたことや道徳的な文句に狭められたことはない。そして、こうした作家こそが、信頼できる作家であつて寛容なのだ。何よりも教師のような人間のところへ行くときに役立つような、細かい知的な慎重さなどは脇においてしまつてしまわないのだ。このようにシェークスピアやゲーテのような作家は、大海原のようであり、彼の大きさと自由な活力は、あまりにも清潔で、太陽とそよ風によつてもあそばれており、彼の活力があまりにも健康的なので、われわれは恐れることなく、白波を横切つて飛び込み、砂浜と浅瀬を離れて、大喜びで深いところへと冒険していくのだ。

この後、逍遙は、「この意は我が『底知らずの湖』と稍々同じきに似たり。」と述べている。

逍遙の言にしたがえば、この文章を読んだのは、『底知らずの湖』執筆の後ということなので、ダウデンの大海原の比喻に触発されて、『底知らずの湖』を起稿したというわけではないようだが、前述したように、明治二十四年十月の『早稲田文学』創刊号の「シェークスピア

ヤ脚本評註緒言」に「近ごろダウデン氏の論文を見れば、シェークスピアとギョオテとを大洋に比したるがあり。趣はやゝ異なれども、同じ理に帰着すべし。」とあり、「没理想」という語は、六月の『梓神子』にすでに見えるので、逍遙の没理想論が固まったのは、このころだと考えられる。しかし、逍遙自身「趣はやゝ異なれども」と言うように、ダウデンの大海原は、道徳や人為、知識を超えた不可思議な力を持つものの比喻として使われていて、その点で「底知らずの湖」と相通ずるところがあるものの、そこから受ける感じはかなりちがっている。すなわち、ダウデンの大海原は、あくまでわれわれを慈しみ育む不可思議な力を持つものとして表現されているのに対し、逍遙の「底知らずの湖」は、美しいのだけれども、不可知の、どちらかといえば不気味な感じを与える存在である。それは、「シェークスピアの研究に倦みはてたる小絶望の結果」であるという成立の事情によるものでもあろうが、そのために逍遙の論は、仏教的、老荘思想的色彩を帯びることになったともいえよう。

次に現れて湖の中に没してしまう三人の人物は、中村氏も指摘するように、それぞれ儒教、仏教、キリスト教を現わしている。「観兆夫子」という命名は、世のありさま、成り行きを見るといふ意味だろう。このあたりは『シェークスピア脚本評註緒言』（『早稲田文学』明治二四年一〇月）中の逍遙の次の発言に対応する。

予がシェークスピアの作の自然に似たりといふは、彼れが描け

る事件、人物が實際のと同じにはあらず。彼れが作は読む者の心々にて、如何やうにも解釈せらるゝことの酷だ造化に肖たるをいふなり。人々試みに自然といふものを觀よ。心を虚平にして觀れば、自然は只々自然にして、善惡のいづれにも偏りたりとは見えぬ。固より意地悪き繼母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。然るに、数奇失意の人は造化を怨み、自然を憤りて、此の世を穢土と罵り、苦界と非るなり。さて又得意の人は、之に反して、造化を情深き慈母のやうに思ひて、此の世を樂園とも思へり。畢竟、人々の思ひ做し次第にて、苦とも樂とも見らるゝが自然の本相なり。此の故に、造化の作用を解釈するに、彼の宿命教の旨をもてするも解し得べく、又耶穌教の旨をもてするも解し得べし。其他、老、莊、楊、墨、儒、仏、若しくは古今東西の思ひくゝの见解も、之れを造化にあてはめて強ちに当たらざるにあらず。否、造化といふものは、是等無数の解釈を悉く容れても余りあるなり。まことに茫として際なきは造化の法相なりと評すべし。

すなわち、造化、自然とおなじように、あらゆる思想、解釈を受け入れる存在としての「底知れずの湖」、つまり「没理想」である。

次に、この後に現れる、文章を美しく描いた服を着て、物差しと巻尺を持った人物について、中村氏は、「衣装はともかく、持物、挙動からすると、西洋型の美学者といったところであろう。」と述べる。そして、もう一人の頭が大きくて、万巻の書物が入りそうな男については、「東洋型の自然耽賞家」であるとし、「当時の洋学者何某、漢学

者何某をおもいあてることもできるだろう。」と述べているが、何某が誰であるかについては言及していない。

しかし、特定の一個人に限定できるかどうかはともかく、ある程度、逍遙の念頭にあつた人物を想定することはできるかもしれない。

「文章ぬし」と呼ばれる男は、風景について「隱喻」「活喻」「崇高の相」などと論評している点は、逍遙の親友で、『美辞学』（前・後編）（金港堂、明治二年）を著した高田早苗を念頭に置いていると思われる。『美辞学』の中で、「隱喻」「暗喻」という語句こそ使っていないが、「修飾を論ず」の中で、「明比 (Simile)」「暗比 (Metapher)」という語を使っており、また、「崇高を論ず」の中では、実例を上げて論じているからである。

ただし、『美辞学』は、あくまで文章表現に関する書物であるので、文法的な事柄については触れられていない。「テニヲハ」について考察した人物は、ほかに誰か別の国語学者を想定しなければならぬだろう。特定はできないが、物集高見『ことばのはやし』（みづぼや、明治二年）の中の「日本小文典」に「テニヲハ」に代表される助詞についての詳しい考察が記されているから、念頭にあつた人物の一人として考えられるかもしれない。

もう一人の頭の大きな人物について、中村氏は、漢学者を想定している。「なべての風景は西湖に形取れるなり」「又た感ずべきはあの楓ぞかし古蘇城外の楓橋より移し植たるにてこそ候はめ」などと言っているのが、漢学の素養があることは確かであるが、「遠近の山々は瑞西の面影とこそ見たれ」とか「これは本草綱目に見えたる無根草とい

ふものならん」とも言っているので、漢学者にかぎらず博学の学者一般を指すと見るべきである。これについては、個人を特定することはできそうもない。

次に現れた現代風の高帽子をかぶった紳士は、近代文明、西洋文明の象徴だろう。すなわち、西洋の近代的文明でさえも、この湖、すなわち、自然は解釈しつくすことができないという意味である。この人物についても個人を特定することは無理である。

まして、その次の田舎じみた親父たちはなおさらである。たがいに自説にこだわり、いさかきをするが、すべて湖に呑み込まれてしまう連中である。中村氏は「低次の甲論乙駁にも、文壇、論壇の現状に対する諷諭があるのかもしれない。」と述べているが、同感である。

なお、あえて解釈するならば、山の神が我々の目をませようとしたものであると主張するものは、通俗的な神道であろうし、世も末なので身を投げるために作ったのだと言うものは、通俗的厭世論者、湖の水は、薬で病を癒すためだと言うものは、同じく通俗的養生訓、湖は、山と水とが寄り添っていることを示すためであるというものは、たとえば石門心学のような通俗的な道徳論者となろうか。

その後に見える「美妙」な帽子をかぶった男について、中村氏は次のように述べている。

この「若き男」が、他の耽美家とちがうのは、かれが凡常の耽美の列をはなれて「一つの胡蝶」を「美の魂」として追いはじめたときから、足を踏みはずして湖底に消えるまでの、その耽美の

激烈なありようにおいてである。「底知らずの湖」は、人間のそういう激越な「小理想」を呑む「没理想」の深さにおいて「底知らず」なのである。

この指摘は、まちがいではないにしても、いささか見当はずれであると思える。この「若き男」は、特定の個人を指していることを中村氏は読み落としているのだ。この「美妙なる帽子」をかぶった男は、山田美妙であるにちがいない。これにはいくつか根拠を上げることができる。この男は、田舎親父たちがいがみあいながら湖に沈んだ後に現れるが、次のように描写される。

此有様を杜蔭にたゞみみて打笑みつゝ見てありし若き男ありおもむろに岸边に歩み寄れるを見るに頭にハ擬製の花の自然をあざむけるを飾りとしたる美妙なる帽子をいたゞき身にハ天工をも驚かすべき精巧の織物を衣装に作りて被り工風を極めたる美しき靴を穿き妙工の製りたる望遠鏡をとりいでゝ四方を見わたし莞爾として口を開き絶妙風物此自然の美何に喩へて何と称へん称ふるに言葉なく褒むるに言葉なしめでたきハ此美其物なり

「美妙なる帽子」を被り、「自然の美」を嘆賞する「若き男」は、この後、草むらから舞い出した胡蝶に対し「美の魂までよ」と呼びかけて、捕まえようとして湖に沈んでしまう。

山田美妙の作で、渡辺省亭による少女胡蝶の裸体の挿絵の入った



『胡蝶』が話題になったのが明治二十二年である。このとき美妙二二歳。

次に引用するのは、『胡蝶』の中の壇の浦の戦いの翌日、平家の女房胡蝶が海から上がった時の描写である。

濡果てた衣物を半ば身に纏つて、四方には一人も居ぬながら猶何処やら吾と吾身へ対するとも言ふべき差を帯びて、風の囁きにも、鳥の羽音にも耳を側てる胡蝶の姿の奥床しき、うつくしき、五尺の黒髪は舐め乱した浪の手柄を見せ顔に同じく浪打つて多情にも朝桜の肌を掠め、眉は目蓋と共に重く垂れて其処に薄命の怨みを宿して居ます。水と土とをば「自然」が巧に取合ハせた一幅の活きた画の中にまた美術の神髄とも言ふべき曲線であまく組立てられた裸体の美人が居るのであります。あゝ高尚。真の「美」は即ち真の「高尚」です。

また、後日談の中の自然の描写も引用する。

西山を啣二十三夜の残月、今些し前まで降続いた五月雨に洗はれた顔の清さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々ハみづから拭つて居ます。夜半、それが此時の「美」の原素で、山里、それがこの処の「美」の源です。

「美妙なる帽子」をかぶった男が山田美妙を寓するということにつ

いて、もはや贅言を要しないであろう。この男は、美を美として賛美せずに、あれこれ解釈しようとした連中がすべて湖に呑みこまれてしまったことをあざ笑うが、彼自身さえ、湖に呑みこまれてしまう。これは造化、自然というものが美という言葉によつても解釈することのできない、不可知の存在であること、あるいは、無限の解釈の可能性をもつたものであることを示している。

なお、この男は、一義的には山田美妙を指すが、美という抽象的概念によつて自然の魅力を説明しようとする点で、敷衍していくならば、美学全体を指すとも考えることができるかもしれない。とするならば、西洋美学をもとに批評を展開していた森鷗外等にも矛先の及びうるものであつたということになる。

それはともあれ、この後現れた精霊が「底知らずの湖」に似たところとして「古池」を持ち出すのは、芭蕉のこの句の解釈多様性を指している。この句の解釈多様性がこの時代にも広く知られていたことは、復本一郎氏の労作<sup>⑤</sup>に詳しい。氏は、江戸時代からの注解を列挙した上で、明治三十一年刊の三巴編『俳諧古池集注』の序文を紹介し、この時代に至つても、この一句が計り知れない深さをもつものであつたと理解されていたことを説いている。

次に精霊が「近き松」については、「仔細があればはず」と言っているのは、逍遙がすでにこの時点で近松門左衛門を取り上げた『梓神子』（明治二四年六月）の構想を持っていたことを示すだろう。

最後に精霊が「底知れずの湖」に似たところは人間界にも二か所あると言つて、シェークスピアとゲーテとの名を上げるのは、前述した

ように、『シエークスピア脚本評註緒言』で「近ごろダウデン氏の論文を見れば、シエークスピアとギョオテとを大洋に比したるがあり。趣はやゝ異なれども、同じ理に帰着すべし。」とあるのに対応する。

そうしてみると、逍遙本人はダウデンの論文を読んだのは「明治二十四年の二月下旬」と言っているが、シエークスピアとゲーテをあげているところからみて、『底知らずの湖』成立以前、すなわち、明治二十三年末以前であつたかもしれない。

### おわりに

以上、『底知らずの湖』の中の比喩について検証してきた。次々と湖に呑みこまれる登場人物たちは、特定の個人を指すとみられるものがあり、あるいは、個人には特定できないものについても、ある程度の範囲で絞って寓意するところを明らかにできたと思う。そういう意味で、戯文ではあるけれども、当時の文壇に対しては、かなり積極的かつ具体的な批評文であつたといふことができる。逍遙の没理想論が、自戒的であると同時に文壇に対する積極的な批評であつたことが再確認できるだろう。

### 〔注〕

- (1) 「没理想の由来」、『早稲田文学』明治二五年四月
- (2) 中村完「『底知らずの湖』と『梓神子』——『没理想』観の成立」、『国文学ノート』二二号、成城短期大学国文学研究室、昭和五九年三月
- (3) 『読売新聞』（明治二四年五月一五日）六月一七日

- (4) 『明治文学全集 一六 坪内逍遙集』（筑摩書房、昭和四四年二月）解説

- (5) 復本一郎『芭蕉古池伝説』（大修館書店、一九八八年四月）

（付記）本稿は、二〇一六年度江蘇省社会科学基金、外国文学、一般項目、共同研究、研究代表者 蘇州大学 潘文東「坪内逍遙文論中中国文化要素研究」による成果の一部である。

（さかい たけし 日本文学科）  
二〇一七年十一月十四日受理